台大日本語文研究第 14 期
2007 年 12 月，頁 47-74
本文 2007-1120 收稿，2007-1221 通過刊登

漱石心目中的「桃花源」
——以『草枕』為題材——

范淑文

摘要

夏目漱石於『草枕』執稿時曾表示，該小說係展現漱石「部份藝術觀及人生觀的小說」。誠如漱石所言，『草枕』全篇透過主角畫家的內心旁白、抑或是與女主角那美的對話等，對自己的藝術觀作了一翻透徹的闡述、並表達了其人生觀。大多研究學者也針對這些內容、比較東西方藝術之特質、對『草枕』的架構及主題等作了諸多詮釋。

『草枕』的場景與陶淵明的『桃花源記』極爲雷同，這點已是不爭之實，然而或許正因爲過於明顯除了前田愛、佐佐木充之外鮮爲一般研究學者所重視，而這兩位學者也忽略陶淵明的存在，把重點放在『草枕』中畫家的出遊爲何是由山路進入、由水路返回的架構？

本稿以『草枕』中畫家之出遊地與『桃花源記』之空間、人、物之架構、以及陶淵明之「悠然見南山」一詩等爲中心，比較漱石與淵明對「桃花源」詮釋的異同，並以『草枕』中畫家所作的兩篇漢詩（漱石於八年前所作之漢詩）、及『草枕』執筆當時漱石的心境等爲佐證資料，進而探討漱石所謂的「人生觀」之實質。

關鍵詞：陶淵明、桃花源記、南山、桃花源、人生觀

“the Land of Peach Blossoms” in Soseki’s Eyes: Centering on *Kusamakura*

Natsume Soseki indicated that *Kusamakura* was a novel presenting “part of his outlook on art and life”. Indeed, through the inner aside of the hero painter and his dialogue with the heroine Nami, Soseki made a systematic and thorough exposition of his outlook on art and life.

It’s clear that the scenes and story of *Kusamakura* are very similar to those of Tao Yuan-ming’s *Peach-Blossom Springs (Tokagenki)*. But actually no scholars pay attention to this, except Maeda Ai and Sasaki Mitsuru. Even they ignore the existence of Tao. They only focus their discussion on the route of the painter’s journey.

Centering on the locale of the journey, the space and structure of Tao’s *Peach-Blossom Springs*, and on Tao’s famous poem “picking chrysanthemums under the eastern fence, leisurely I look up and see the Southern Mountains”, this paper tries to compare the similarities and differences of the interpretations of “the Land of Peach Blossoms” between Tao and Soseki. At the same time, using the two Chinese poems written by the painter in *Kusamakura* and the mental state of Soseki when he wrote the novel as evidence, we’ll discuss “the Land of Peach Blossoms” in Soseki’s eyes, and his outlook on life.

Key words: Tao Yuan-ming, *Peach-Blossom Springs*, the Southern Mountains (nazan), the Land of Peach Blossoms (a fictitious land of peace), outlook on life

漱石の「桃源郷」とは
――『草枕』を例にして――

要旨

『草枕』の執筆中、漱石は「芸術観及人生観の一局部を代表したる小説」だと友人への書簡の中で、『草枕』の性質について語ったことがある。その言葉の通り、画工の語りや那美との対話などを通して、その芸術観や人生観と思われる表現が随所に散りばめられている。そして、多くの研究者もこうした内容に焦点を合わせ、東西の芸術の特徴を比較したり、『草枕』の構造またはモチーフについて様々な解明を下した研究成果を残している。

『草枕』のトポスが陶淵明の『桃花源記』の世界を彷彿させているのは言うまでもないことである。然し、それがあまりにもはっきりしているためであろうか、前田愛及び佐々木充両氏以外に殆んど注目されていない。そして、この両氏は陶淵明の存在に目を向けず、画工の旅がなぜ往路が山道で、復路が水路なのかという作者の意図の解明に焦点を合わせている。

本稿は画工の旅先と『桃花源記』における空間、登場人物、物の配置、及び陶淵明の「悠然見南山」という詩に焦点を据え、漱石式の「桃源郷」と淵明式の「桃花源」の本質を究明すると共に、更に『草枕』に織り込まれている二首の漢詩(漱石が八年前に作った漢詩)や『草枕』執筆前後の漱石の心境などを参照しながら、漱石の所謂「人生観」の真義の解明を試みたい。

キーワード：陶淵明、桃花源記、南山、桃源郷、人生観

漱石の「桃源郷」とは
――『草枕』を例にして――

范淑文
台湾大学日本語文学系　副教授

（一）はじめに

大反響を呼んだ『吾輩は猫である』(以下『猫』と略す)を書き上げ[1]、十日ほどしか休まなかった漱石は、引き続きその次の作品『草枕』に着手した。明治三十九年七月二十六日から八月九日まで約二週間ほどでまとめられた『草枕』[2]は、漱石自身の言葉を借りれば、「芸術観及人生観の一局部を代表したる小説」[3]だと思われる。この言葉を裏付けるかのように、『草枕』全篇に渡って、画工が旅先の那古井に向かう山道を歩いている時や、一人になって宿泊先の旅館の部屋で思いに耽っている時、また女主人公那美との会話においても、更には観海寺の大徹和尚と話している場面などなど、主人公画工はいずれもその視点を芸術から離さず、東洋や西洋の芸術や、美的感覚の世界へと話の筋を誘導していったり、芸術や美に関する内容を深めていこう、いこうとしている姿勢の描写が点在していることはいうまでもなかろう。不思議に寂れ果てた一寒村に住んでいる「出返り」の女那美までも最初からハイクラスで西洋的な視点に慣れているかのように何の苦もなく、画工との話についていける。しかも画工の画題の狙いを凡て心得ているように、振袖の姿を画工に見せたり、また裸で画工の前に現れたりしている。画工が山の奥に来て

---

[1] 七月十七日付高浜虚子宛の書簡には「猫の大尾をかきました。京都から帰つたら、すぐ来て読んで下さい。」という一節がある。(『漱石全集　第 22 巻』P.523)
なお、本稿における漱石著書の引用は『漱石全集』全 28 巻（1993－1999 岩波書店）に従う。

[2] 荒正人『増補改定　漱石研究年表』(1984.6.20 集英社）によれば、(明治三十九年)「七月二十六日(木)、『草枕』起稿する。」「八月九日(木)、午前、『草枕』脱稿。本多直次郎(嘯月)受け取りに来る。二、三日休養する。その後、講義ノートを作る予定である。」と記載されている。P.412.413

[3] 明治三十九年八月七日畔柳芥舟宛の書簡である。(『漱石全集　第 22 巻』P.538)

いる旅の目的――画題求め――に、那古井で唯一のモデルである那美がそれに十分に応えるような設定ばかりである。それ故であろうか、那美を題材とする絵が一つの絵として立派に成立するか否か、那美の不思議な言動の持つ意味や、またその絵の仕上げとして不可欠とされる最後の場面である「不思議にも今迄かつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いてゐる」という那美の表情の変化など絵にまつわる諸問題が、研究者の間で早くから議論の的となっていた。この方面における研究成果は、たとえば、清水孝純氏や東郷克美氏、大津知佐子氏、小坂晋氏などの研究者の名[4]を挙げることができる。その他、上記の諸氏らとはやや異質で完全に絵画を美術的視座から捉えた見方、例えば岩の一角に立つ那美のポーズが西洋の絵画を彷彿させると立証した芳賀徹氏[5]の研究を絵画と文学の接点をめぐる研究ジャンルの先駆と見るのに誰しも異議はなかろう。しかし、

> 山路を登りながら、かう考へた。
>
> 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。
>
> 住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。[6]

という『草枕』の冒頭のところに今回の画工の旅――那古井に向かう旅――の目的がはっきりと言明されていることを見落としてはならない。あまりにも皆に知れ渡っていることであるから、却って研究者の焦点から外されているのであろう。が、上記のような先行研究の方法以外に、この冒頭の言葉を手がかりにする方法も、画工

---

[4] 清水孝純氏には「「草枕」の問題――特に「ラオコーン」との関連において――」(「文学論輯」21号・九州大学文学研究会・1974.3)、東郷克美氏には「「草枕」――水・眠り・死――」(『別冊国文学夏目漱石必携Ⅱ』14号・学燈社・1982.2)、大津知佐子氏には「――波動する刹那――『草枕』論――」(「成城国文学」第4号・成城国文学会・1988.3)、そして小坂晋氏には「『草枕』の憐れ」(『国文学解釈と鑑賞』第55巻9号・至文堂1990.9)と、それぞれ『草枕』における那美をモデルとする絵や、那美の表情などについて論点を展開する先行研究がある。

[5] 芳賀徹『絵画の領分―近代比較文化史研究』1990朝日新聞社

[6] 『草枕』(『漱石全集　第3巻』) P.3

の内面、置き換えれば漱石の内面（画工と同じ煩悶を『草枕』創作当時の漱石自身も抱えていたことを後に立証するが）を理解するのに最も近い道ではないかと思われる。

となると、画工の旅先は如何なる所であろうかという問題が先ず問われる。「人の世は住みにくい」と苦悩している画工の精神を癒すために、旅先である那古井の地理的環境が陶淵明の『桃花源記』の世界――中国の文人の憧れの理想地――に重なるという設定の必然性が明らかになってくる。しかし、画工が那古井に向かう行きの道が山路で、帰りが那美一家と水路で下っていくという設定が『桃花源記』のと食い違っている点が、前田愛氏と佐々木充氏に注目された。

(1)『草枕』の世界が桃源郷のトポスをかりていることはよく知られているが、冒頭の那古井温泉へ向う山旅と末尾の那古井温泉から鉄道の駅に出る舟旅とは相互に補完しあっている。陶淵明の『桃花源記』の往路にちりばめられているのは、桃花と船と渓流のイメージであるが、那古井温泉を目指す画工の長閑な山旅は、茶屋の老婆が物語る長良乙女の伝説と彼が連想するミレーの「オフィーリア」に流れのイメージは暗示されているものの、出征する久一青年を送る川下りの場面で、『桃花源記』の三つのイメージが加えられるのである。往路と復路の描写を桃源郷のトポスに収斂させて行く過程は、読者の想像力にゆだねられている。[7]

(2)飛躍をあえて犯せば、那古井とは画工にとってただの目的地ではないのであって、選ばれた処、いうなれば、一種の〈聖なる地〉なのではあるまいか。（中略）行脚の旅が、「非人情」に徹することによってはじめて可能であることは、すでに画工の前に、少なからぬ世捨人＝文人たちが明示してくれている。[8]

[7] 前田愛「世紀末と桃源郷　『草枕』をめぐって」『漱石作品論集成　第二巻』編者片岡豊　小森陽一・1990.12.1・桜楓社 P.263)（初出--「理想」第 622 号・理想社 1985.3）

[8] 佐々木充「「草枕」――根源の記憶の地への旅――」(『漱石作品論集成　第二

(1)の引用文は前田愛氏の研究で、『草枕』の世界を「桃源郷のトポスをかりている」と言明しており、画工の旅の往路と復路に焦点を当てながら、陶淵明の『桃花源記』の世界に相似すると、主張している。(2)の引用文は佐々木充氏の論文の一節で、画工の旅の往路を、「柳と柳の間に的皪と光るのは白桃らしい」という『桃花源記』の世界を彷彿させる楽な水路を拒絶し、「路は頗る難儀だ」という険しい山路に設定したのは、展開されていく画工の旅を世間で一般に考えられている身も心も安らぐような旅ではなく、「行脚の旅」だと看做し、向う目的地である那古井は即ち「一種の〈聖なる地〉」だと、氏は解釈している。「行脚の旅」である為には、楽な道では意味がない、様々な困難を乗り切ってこそ「聖地」に到達することが許されるのであり、苦しみを味わってからこそその目的地の真義が味わえ、一つの報われとして、復路には『桃花源記』のような世界が待ち受けていたのである。往路が山道で復路が水路という、一見矛盾に思われがちだが漱石が敢えてそうした設定を堅持したのはそこに意味があるのだと、そう設定せざるを得ない理由を氏は解明している。

両氏共とてもユニークな発想を示している。が、画工が山路を歩きながら、西洋と東洋の芸術の特徴について考えて下したその結論が、画工の旅の主旨であり、または陶淵明の『桃花源記』の世界に対する画工の捉え方にもつながることに注目したい。その一節を次に引用しておく。

> ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粋なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか浮世の勧工場にあるものだけで用を弁じて居る。(中略)
>
> うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東

巻』編者片岡豊　小森陽一・1990.12.1・桜楓社　P.245)(初出--『夏目漱石』有精堂 1982.2)

籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。(中略) 超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。独坐幽篁裏、弾琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。[9]

東洋の詩には俗世界を「解脱」させてくれる神秘な力が秘められていると、画工は西洋の詩と東洋の詩との優劣を比較した後結論付けている。そして東洋の詩の中で王維や陶淵明の詩が最も優れ、「別乾坤を建立」する役割を果たしていると賞賛している。特に陶淵明の「悠然見南山」の詩で歌われている境地にテクストの中で何回も触れている。又、画家でありながら苦心を重ねても中々画が描けないでいる中で、中国の詩人の真似とも思われるように、漢詩を苦もせず二首も作ったことは意味深いと思わずにはいられない。

以上を鑑み、小稿では、『桃花源記』(以下「桃花源」と称する) 及び陶淵明の「悠然見南山」という詩の境地と画工の旅先の描写を比較し、『草枕』に織り込まれている二首の漢詩を参考にしながら、画工または作者漱石にとっての真の理想地である「桃源郷」の境地にアプローチしてみる。

(二)画工の中に見える漱石

冒頭の「人の世は住みにくい」「安い所へ引き越したくなる」というのは、つまり旅立つまで画工が生活していた場所、またはその場所で接しなければならない人や事物が、画工にとって煩わしい、出来ればその空間やそのような人間とのかかわり及びそうした事物から逃れたい為に今回の旅が始まった、とする解釈が一般的であろう。その煩わしさは如何なるものなのか、作品の中では具体的には言明していない。しかし、「ここに詩人といふ天職が出来て、ここに画家という使命が降る」と、画や詩などの芸術の秘めたる力が、煩悶を忘れさせ、煩っている人の心を和らげてくれる働きがあると、画工は信じている。そうしたことを読者に納得させようと考慮したうえ、

[9] 『草枕』(『漱石全集　第 3 巻』)P.9.10

画工というキャラクターの設定にした作者の意図は明らかである。その設定に応じ画工は身分相応の恰好で、カンバスを抱えて旅に出る。

さて、『草枕』執筆前後(三十九年七月から八月の間)に於ける漱石の身辺やその精神はどんな状態だったのか、つまり漱石はどんな心境の下でその作品を綴ったのか、友人への書簡から幾つか抜粋して探ってみよう。

(1)小生先日下女二名を一時解雇し面倒だから雨戸を開放して寐た事有之候。下女が出来ねば毎晩戸を立てないで、三度共パンを食つて掃除もしないでいつ迄も暮す積りに候ひし処又下女が両名出来た為め折角の計画も無駄に相成候。[10]

(2)所が此方は毎日御苦しみの方で何とも申されない位。文債を果たす約束はある、人はくる、飯を食ふ、腹がはる、薬を飲む、散歩に出る、文章をかく気がなくなる、かくひまもなくなる。[11]

(3)今日春陽堂の本多嘯月先生催促かたがた御来訪になる。僕唯々として汗をかいて原稿紙へ向ふ。中々苦しい。[12]

何れも明治三十九年の書簡である。引用文(1)は七月十一日付森円月宛の書簡で、「下女二名を一時解雇し」たと書いてある。大学で教鞭を執る傍ら、常に原稿を催促されているほど忙しい作家である漱石がこうした家庭内の煩瑣なことまで口を出したのは、よほどの煩悶ごとで苛立っており、その気持ちがつい二人の下女に当ってしまったのではないかと推測できる。引用文(2)(七月二十五日付浜武元次宛の書簡)に書いてある「毎日御苦しみの方で何とも申されない位。

[10] 『漱石全集　第22巻』P.523
[11] 『漱石全集　第22巻』P.530
[12] 『漱石全集　第22巻』P.534
付記、「催促かたがた」の繰り返しの部分は横書きの関係で、かなで表記する。以下同。

文債を果たす約束はある」、または引用文(3)（八月三日付森田草平宛の書簡）にある「春陽堂の本多嘯月先生催促かたがた御来訪になる」「中々苦しい」などの言葉から、当時漱石は原稿に追われていて苦しんでいることが明白であろう。二松学舎の在学中一時期文学で身を立てることまで考え、文学を嗜んでいた漱石は自分の思考していることを文字で表現し、沢山の人々に読んでもらえるのは何よりも幸せだと思っていた筈であった。が、『猫』の連載によって一遍に名を知られ、方々から原稿の依頼が殺到して来た状態に、さすがの漱石もそのプレッシャーにはお手上げにまで追い込まれたのも想像出来ないこともない。が、当時漱石にとっての煩いはそれだけではなかったらしい。

『増補改定　漱石研究年表』によれば、『猫』を脱稿する少し前、漱石には京都帝国大学から招聘の話が持ち込まれたのである。

> 七月九日(月)、狩野亨吉から、京都帝国大学文科大学新設に際し、英文学の講座担当を依頼される。
> 七月十日(火)、狩野亨吉に取りあえず、断りの手紙を出す。千駄木が嫌いだから、千駄木を去ることできぬ。(中略)（東京帝国大学への不満があったものと推定される）[13]

友人狩野亨吉の斡旋で京都帝国大学英文学の教授として赴任して欲しいという話である。そのことについて、その年七月十日付狩野亨吉宛の漱石からの書簡にもそのような内容の文面が見られる。

> ご返事仕る考に候へども京都へ御出立前に一応只今の意向相のべ御参考に供し候はゞ総長にも御面会の節多少の御便宜かと存じ一寸郵便にて申上候
> 大体の上より京都はあまり志望仕らず他に相当の候補者あらば喜んで其人に譲り度と存候。[14]

[13] 荒正人『増補改定　漱石研究年表』1984.6.20 集英社 P.411.412
[14] 『漱石全集　第 22 巻』P.521

京都へ行くか行かないかその決定を下すに漱石は随分迷っていたらしい。結局は「京都はあまり志望仕らず」という理由で、他の候補者を考えてくださいと、狩野亨吉にその話を断ったが、果たしてそれが決定的な理由だったかは判明しようがない。それより、漱石が教職の魅力を感じなくなったのが最も大きな決め手だと言った方が妥当かもしれないし、事実その教職を辞めたい心境を何人かに吐いている。教職が厭になった理由と考えられる、友人への書簡をいくつか一緒に並べておこう。

(1)来月は講義をかゝなければならん。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大学は辞職仕りたい。[15]

(2)今般東京大学にては一名の西洋人を雇ひ入候由なれば小生は都合によりては辞任するとも差支なきに至るやも許りがたく。[16]

(3)実は来学年の講義を作らなければ大雄篇をかくか大読書をやる積りだが講義といふ奴は一と苦労です。是は八月に入つてからかき出す積りです。[17]

(1) は七月十七日付小宮豊隆宛の書簡で、 (2)は七月十九日付狩野亨吉宛の書簡、そして(3)は少し前、七月二日に高浜虚子に宛てた長い書簡の一節である。(1)と(2)で、大学を「辞職」したいとはっきり語っている。しかも、(1)で「講義を作るのは死ぬよりいやだ」と、講義の準備で日々を煩わしく感じている心境、それを思うと「大学は辞職仕りたい」と、大学を辞めたい理由に言及している。(3)でも「講義といふ奴は一と苦労」だと、講義作りの煩わしさを吐いている。以上の資料を纏めてみれば、前節の「文債」の煩いを抱えた上に、更に重なっている大学の講義を作るのが一大苦労で、その煩い

[15] 『漱石全集　第 22 巻』P.524
[16] 『漱石全集　第 22 巻』P.525
[17] 『漱石全集　第 22 巻』P.519

から遁れたいという心理の反射で教職を辞めたいと思うようになったのであり、『草枕』執筆前後の漱石の精神状態だと理解しても差支えがなかろう。ついでであるが、実は漱石が教職を辞めたいと思ったのは今回が初めてではなかった。九年ほど前に、熊本に在職していた頃も一回教職に飽きた心境を親友正岡子規に吐いたことがある。

> 実は教師は近頃厭になり居候へども(中略)実は去年十月頃教師をやめたいが好分別はなきやと中根に相談致し候処外務の翻訳官に依頼し置きたり (中略)教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり月々五六十の収入あれば今にも東京へ帰りて勝手な風流を仕る覚悟なれど[18]

明治三十年四月二十三日に正岡子規に送った書簡の一節である。教師が厭になった理由は語られてはいないが、教職を辞めたいとはっきり表明している。漱石は他にも非常勤の形で高等師範学校などへ出講に行った経験はあったが、『増補改定　漱石研究年表』[19]によれば、常勤講師として勤めたのは二十八年四月から、二十九年三月までの愛媛県松山尋常中学校と、二十九年四月から第五高等学校英語の教授として熊本に転任した期間だと記載されている。つまり、正式に教壇に立ってから、二年ほどで教師の仕事に飽きてしまったということになる。そして、イギリス留学から帰国して、二度目の教職である東京帝国大学においては、三年目で教職の煩わしさを感じたのである。前掲した子規に送った書簡に書いてあるように、漱石は「教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり」と、教師よりも文学者の生活に早くから憧れていたのは改めていうまでもないことであろう。この志の実現にはもう少し時間が必要とされた。

しかし、明治三十九年七月頃、人から見れば願っても求められな

[18] 『漱石全集　第 22 巻』P.122.123
[19] 荒正人『増補改定　漱石研究年表』1984.6.20 集英社 P.162.182

い大学の教職を辞めたいと思うほど漱石を苛立たせたのはもう一つ要因が推定できる。前掲した七月十九日に狩野亨吉に送った書簡であるが、辞任しようと言う思いにまで漱石を追い込んだ原因として考えられる為、もう一度引いておこう。

> 今般東京大学にては一名の西洋人を雇ひ入候由なれば小生は都合によりては辞任するとも差支なきに至るやも許りがたく。[20]（下線引用者）

率直に言えば、下線が引いてある「東京大学にては一名の西洋人を雇」う噂が立っているというのが辞任の思いに至った最も直接な要因と思われる。なぜなら、自分の専門とは関係ない、或いはその西洋人の存在が自分には何の影響も齎さないなら、自ら身を引くまでのようなことをする必要がなかろう。その西洋人の赴任が自分の立場に脅威を与えることが予想され（或いは妄想かもしれないが）、英文学を担当する漱石の中にその不安感が高まってきたため、一層身を引いておこうと思い立ったことが推定できる。[21]

これまで探ってきた、『草枕』執筆前後に於ける漱石の精神状態やそれに関っている世間の様子を纏めてみれば、漸く文才が世間に高評され、ずっと前から憧れていた文学者生活の夢は手に入れたものの、(1)方々から依頼（というより当事者である漱石の身にすれば催促と感じていたかもしれない）された文債が溜まり、(2)京都帝国大学からの招聘を引き受けるべきかどうか、(3)大学での講義やそのための「講義作り」、更に(4)近頃自分のライバルになる可能性のある西洋人の講師が迎えられることがもたらした不安感などの諸要因が、一斉に漱石の内部に詰まり、鬩ぎあっていた。漱石流に言えば、神経衰弱を起こすような状態だったのである。そうした俗世界、画工の言葉に置き換えれば「住みにくさが高じる」「住みにくい」俗世界

[20] 『漱石全集　第22巻』P.525
[21] 荒正人『増補改定　漱石研究年表』(1984.6.20集英社）には「東京帝国大学では、西洋人を一人雇うことになるので、自分の地位に不安を覚える」と記している。P.412

の煩いから逃れ、息抜きをしたい気持は漱石が友人に送った書簡からも窺える。

> 猫の大尾をかいた。八月のホトゝギスには出るだらうと思ふから読んでくれ玉へ夏は閑静で奇麗な田舎へ行つて御馳走をたべて白雲を見て本をよんで居たい。[22]

明治三十九年七月十七日付小宮豊隆宛の書簡である。『猫』を脱稿し、『草枕』を起稿する直前の頃であった。「閑静で奇麗な田舎へ行つて」「白雲を見て本をよんで居たい」というのが『草枕』に描かれている旅に出る画工の心境とそのまま重なっているのは自明のことであろう。よって、『草枕』における画工の旅立つ意図、その精神を癒す働きのある「桃源郷」の捉え方は、即ち作者漱石の投影であり、漱石の思想と見做しても差支えがなかろう。

（三）淵明の「桃花源」と画工タイプの「桃源郷」の異同

さて、「閑静で奇麗な田舎へ行つて」「白雲を見て本をよ」むという境地は『草枕』において、どのように構図化されているのであろうか。前述した通りに、画工が向かう那古井の地形について、前田愛氏が『桃花源記』の世界を彷彿させる説を支持している。私も基本的にはその説に従いながら、陶淵明の「桃花源」と那古井の世界を詳細に検討して画工（漱石に置き換えられる）タイプの「桃源郷」を新たに認識したい。

便宜を図るために、陶淵明式の「桃花源」と『草枕』の世界におけるそれぞれの特徴を四項目に分けて、それに当たる代表的な表現を表一のように並べて考察してみる。

---

[22] 『漱石全集　第 22 巻』P. 524

	陶淵明の「桃花源」	『草枕』の世界
1 季節	桃花林	的皪と光るのは白桃
2 地形	山有小口	路は頗る難義だ、吾等の為に道を譲る景色はない
3 村風景	雞犬相聞	鶏、老婆、馬子、床屋、住職、志保田旅館の人々等
4 生活振り	竝怡然自楽	出返り、不人情

表一

先ず、1 番の季節の項目であるが、両方とも、春のシンボルである桃という美しい花を扱うことで、人間にとって最も暮らし易く、生命力に溢れている春と季節を設定している。そもそも『桃花源記』以来、桃が「桃源郷」やユートピアの象徴とされているのは言うまでもなかろう[23]。次に 2 番の地形について考えよう。『桃花源記』では、「山有小口」と記述されており、山の中、しかも道路があるわけではなく、人間が屈んで漸く入れる位の小さい洞窟の入り口という様子が想像出来る。一方、那古井に入る前の山道の一部だが、「路は頗る難義だ」「石は切り砕いても、岩は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に悠然峙つて、吾等の為めに道を譲る景色はない」と言う表現で、画工の所謂住み「安い所」に入るにはかなりの苦労をせざるを得ないほど、那古井は外部の世界と隔絶しているかのように険しい山々に囲まれているというイメージを作り出している。ここまで両者が共通しているのは明らかである。

続いて、3 番の村風景の項目に移ろう。『桃花源記』では、「雞犬相聞」という表現で、その時代においては如何にも生活が豊かで平穏であることを象徴していると捉えられる。というのは、鶏と犬に関して、例えば淵明の「歸園田居五首」（園田の居に帰る五首）其一

[23] 漱石にとっては、「或時、青くて丸い山を向ふに控えた、又的皪と春に照る梅を庭に植へた、又柴門も真前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て」と、「思ひ出す事など」という回想のエッセイの中で語っているように南画的な世界、理想郷のシンボルは桃の花とは限らず、梅の花もありうるが、春にこだわる点は淵明と変らないのである。(『漱石全集　第 12 巻』P. 427)

の中にも「狗吠深巷中　雞鳴桑樹顛」と、同じく犬と鶏の存在が、裕福さと人々ののんびりとした生活の象徴として詠われている例が多いからである。また『陶淵明集全釈』の注によれば、特に「鶏」は昔の中国農村社会において、「鶏をつぶして酒を出すというのは、百姓家としての最高の歓待である」[24]と説明されており、上垣外憲一氏も「陶淵明の故郷の田園では、犬、鶏の鳴き声は心の平和の象徴であった」[25]と捉えている。そうした陶淵明文学における「犬」「雞」像を踏まえているかのように、漱石の漢詩の中にも「人間至楽江湖老　犬吠鶏鳴共好音」[26]と、「犬」や「鶏」が一種の精神の平穏や楽園の象徴として詠われている。

さて、『草枕』の世界に目を向けよう。『草枕』の世界で生活しているのは『桃花源記』に登場している鶏のほか、老婆、馬子、床屋、住職、志保田旅館の人々などの登場人物も大きな意味を持っている。一見第二章に描かれている老婆と馬子のしぐさや喋り方などには春の季節にぴったりした長閑なムードが漂っているところから「桃源郷」の世界を彷彿させないこともないが、二人の話の中に出ている「志保田の嬢様」や「旦那様の勤めて御出の銀行がつぶれました」などの話題はいずれも上記の「平和の象徴」とか、豊かな生活とは無縁であることは明かであろう。更に床屋のおじさんや志保田旅館の人々になると、言葉が乱暴に見えるか人生が不幸に繋がると思えてならない。唯一平和といえるのは住職をはじめとするお寺だけであろう。こうした村の風景は決して『桃花源記』の類とは言えない。寧ろ、画工が旅の前から逃れようとしたかった俗の世界というしかない。

このように、『桃花源記』に於ける人々の生活振りは「竝怡然自楽」、つまり悠々として楽しく生活していると語られている。一方、『草枕』

[24] 田部井文雄＆上田武『陶淵明集全釈』2001.1.30 明治書院 P.326
[25] 上垣外憲一「漱石の帰去来――朝日新聞入社をめぐって――」　(『講座夏目漱石　第四巻』1982.2.5 有斐閣)P.116
[26] 漱石が明治四十三年十月十一日に作った、No.90 無題詩の一節である。『漱石全集　第 18 巻』P.259-263

では、全く異なるものとなっている。最も注目せざるを得ないのは「出返り」の那美の「奇矯」に満ちた身振りそぶりそのものであろう。夫の仕事の失敗で「出返り」したことはつい「不人情」と村の人々に批判され、兄との会話も口論めいた口調が多かったという状態である。以上のように季節や地形、村風景及び生活振りなどの諸項目における比較によれば、陶淵明の『桃花源記』の世界は完全な「桃花源」であるのに対して、一方、『草枕』の世界は一見「桃源郷」のようではあるが、それはあくまでも空間的条件に限られているというしかない。つまり、そのヒロインである那美の世界は「桃源郷」どころか、様々な煩悶に満ちた俗世界であることは明らかであろう。

といっても、陶淵明式の「桃花源」と『草枕』の世界の分析はこれくらいのレベルでは片手落ちである。実は『桃花源記』の他に、一つのユートピア、隠遁者生活としての理想郷を陶淵明がしばしば詩を通して詠っていたことがよく知られている。最も有名なのは何と言っても「飲酒二十首」に収められている「悠然見南山」の一首である。『草枕』の中では画工がしばしば「悠然見南山」に触れ、「文学ノート」の中では、漱石が陶淵明のその詩の素晴らしい境地を賞賛している[27]。よって、陶淵明の「桃花源」に言及する際、「悠然見南山」の詩をも考慮に入れないと、淵明の心の中の「桃花源」の真髄を理解し得ない。この「悠然見南山」の句の前には「采菊東籬下」という句がある。菊の花を採りながら、悠然と南山を眺めてみるという風景を想像してみよう。菊という花はもともと中国の文人世界では君子のシンボルとして親しまれており、そんな寓意の含まれた花が庭の垣根に植えてある、それだけでも隠遁者の生活の匂いが漂っていると思われる。更に夕暮に[28]、その菊の花を少し摘みながら、

[27] 漱石は「文学ノート」の中でも、「東西文学ノ違」について、「是根本的ニ日本人ト立脚地ガ違フナリ. 西洋人ハアク迄モ出間的(ママ)デアル(中略)Humanistic interestアルナリ. 極言スレバ浮世トカ俗社界ヲ超脱スルコト能ハザルナリ. 吾人ノ詩ハ悠然見南山デ尽キテ居ル、出世間的デアル、道徳モ面倒ナコトモ何モナイ」と、このように、「悠然見南山」を賞賛している。『漱石全集　第21巻』P.101

[28] 次の「山氣日夕佳　飛鳥相與還」という句から、時間は朝ではなく、夕暮だ

彼方に聳えているあの美しい南山、山にかかっている雲をのんびりと眺めているという風景は、世俗のすべてとはかけ離れている自由自在に、欲しいままに振舞っている隠遁者の姿そのものだと誰しも納得できるだろう。しかし、首聯の「結廬在人境　而無車馬喧」という部分を決して見落としてはいけない。淵明は役人を辞任してから、柴桑という地方都市の郊外に庵を構えていたと言う記録が残っている。その柴桑の郊外という場所の状況について、田部井文雄氏・上田武氏共著の『陶淵明集全釈』によれば、

> 地理的条件のもとで、江州、尋陽郡、柴桑県各レベルの地方官僚との交流が重ねられていることは、隠士としての彼の風貌に複雑さを加える一つの要素であることは確かである。[29]

と書かれているように、隠遁者の生活を志向しているといっても、淵明は山の麓や奥山など人気のない辺鄙な所に庵を構えていたわけではなく、少なくとも一部の農民と一緒に畠で働いたりしながら、殆んど自給自足に近い生活を営んでいたことが推定できる。しかも、かつての職場での仲間や文人たちも時々訪れてきた。よって、この「結廬在人境　而無車馬喧」は虚構ではなく、淵明の生活ぶりそのままの反映だと看做す事が可能であろう。つまり、周りには他の人家がいくつも構えられていて、世俗の空間に住んでいるが、役人の車（役人が訪れる煩わしさ）[30]がないという意味である。それよりその次の「問君何能爾　心遠地自偏」という句はもっと意味深い。『陶淵明集全釈』には、

> 「あなたに問いかけよう。どうしてそのように（過ごすことが）できるのか」と(いう人もいるであろう)。(それに答えれば、私の）心は遠く（俗界から）離れへだたっているので、

ということが推定できる。

[29] 田部井文雄氏＆上田武氏『陶淵明集全釈』(2001.1.30 明治書院) P.9

[30] 田部井文雄氏＆上田武氏『陶淵明集全釈』(2001.1.30 明治書院) を参照したものである。P.167

（住む）土地も(心のありようによって)自然と辺地に変わってしまうのだ（ということになる）。[31]

のように現代語に訳されている。俗世界に身を置きながら、そうした俗世界の煩わしさを逃れ、隠遁者としての視点で、長閑に脱世間の生活が出来たのは、あくまでも「心遠」という心持で日々を送っているが故であり、俗世界が「地自偏」に感じることが出来たからである。なにも、わざわざ奥山に身を隠し「悠然見南山」の生活を得たわけでもないと捉えられる。

さて、再び『草枕』の世界に目を向けよう。旅に出た画工を待ち受けていたのは奥山である。「桃源郷」のような奥山にある世界ではあるが、深入りすればするほど、戦争の匂いや、そこから蒙った那美の夫の悲惨な運命や、それに繋がる那美の直面せざるを得ない新しい人生の歩み方、そこから背負わなければならない宿命の試練などなどが厭になるほど画工の目に留まり、耳に入るのである。画工の旅先である那古井の自然、その地理的環境は一種の「桃源郷」と思われるが、「淵明だつて年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし」という画工の言葉の通りに、所詮人間の世界を長く離れられない、我が生きている限りこのような俗世間のことはどこまでもついて来るのだ、というのが現実だと画工が那古井で新たに認識させられたというしかない。ここでは、こうした画工の心境に似ている、漱石が「思ひ出す事など」で述懐している一節をも思い出さずにはいられない。

斯んな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の真面目な顔をしげしげ眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるかと左も気の毒さうに云つた。[32]

と、画工の「淵明云々」の心境と似通っているといえよう。繰り返しになるが、つまり、「住みにく」いところから逃れようとして、出

[31] 田部井文雄氏＆上田武氏『陶淵明集全釈』（2001.1.30 明治書院）P.167
[32] 『漱石全集　第 12 巻』P.427

世間のつもりで旅に出た画工が一旦その旅先に着いたら、どこまでも俗世間がくっ付いてき、人間は生きているうち俗世間から所詮離れきれないと自覚したのである。それを予測していたように、那古井に入る前に万事に「非人情」という姿勢で接すれば楽になるだろうと自分で自分に言い聞かせているのである。俗世間から離れきれないという諦めや俗世界への「非人情」の態度は淵明の「結廬在人境　而無車馬喧」という生活実態及び「問君何能爾　心遠地自偏」という隠遁者が俗世界の煩瑣に動かされない心の実態と似通っているのは明らかであろう。ここでの似通っているというのは基本的にはそのポリシーが同じ雰囲気を彷彿させるが、同質とは多少距離があり、例えば表現法などどこか微妙に異なっているという意味を指しているのである。

両者の相違をつかむためには、画工が那美の絵を画こう、画こうと何回試しても中々カンバスに絵の具を塗ることが出来なかったが漢詩を二首作った、ということを思い起こしながら検討してみたい。その二首の漢詩は実は明治三十一年三月[33]に詠んだ「春興」と「春日静坐」と題したものである[34]。二首とも『草枕』における画工が求めようとする、俗世間から切り離された隠遁者らしいムードが漂っている詩である。例えば、「春興」の「聴黄鳥宛転　観落英紛霏」という句は『桃花源記』の「芳草鮮美、落英繽紛」という、草花が茂っており、花が美しく咲き乱れている春麗らかな季節を彷彿させ、または雲雀の鳴き声を聞き、一面に咲いている菜の花を眺めたりしている画工の描写ともぴったりと重なっている。更に、「春日静坐」の「遐懐寄何処　緬邈白雲郷」という、雲と交流する優雅に過ごしている文人っぽい姿も、画工が憧れる陶

[33] この二首の詩の創作時期について、和田利男氏（『漱石漢詩研究』1937.8.1 人文書院）が漱石の漢詩創作期の第一期と、鄭清茂氏（『中国文学在日本』1982.10 純文学出版社）、又は中村宏氏（『漱石漢詩の世界』1983.9.5 第一書房）、佐古純一郎氏（「漱石の漢詩文」『講座夏目漱石　第二巻』1982.2.25 有斐閣）等三氏によれば、第二期とされている。

[34] それぞれは漢詩集の中に 65 番、67 番と編纂されている。（『漱石全集　第 18 巻』P.194-204

淵明の詩「悠然見南山」の境地そのままの再現と看取できる。そして「春興」の結びの「逍遥随物化　悠然対芬菲」という句が全篇の真髄であり、当時の漱石が目指した精神の集約と看做すことも出来なくもない。勿論「逍遥随物化」という表現が『荘子』の「逍遥篇」を踏まえているのは明白なことであろう。これについて加藤二郎氏は、

> 熊本時代の漱石詩は「草枕」中に使われた二首（六・十二の各章）をも含めて、その詩の基調はおおむね老荘であり禅である。先に引用の英文の「断片」の体験的な究極性ということからすれば、それは質的には寧ろ宗教以前、即ち老荘や禅すらもそこから生れ又そこに消えて行く様なある究極的な世界の現成として自覚されていたであろう…。[35]（下線引用者）

この二首の漢詩「春興」と「春日静坐」を「老荘や禅すらもそこから生れ又そこに消えて行く」「究極的な世界の現成」と捉え、悟りの具現だと高く評価している。この詩の境地に似た表現はまた、「洗尽塵懐忘我物　只看窓外古松鬱」[36]という句にも見出せる。この「洗尽塵懐云々」の詩について、佐古純一郎氏は次のようにこの詩の境地を捉えている。

> 「塵懐を洗い尽して我物を忘れ」るということは、心に虚霊不昧ヲ現成するということであろう。私はそのことこそ漱石文学の「志」であったと思う。「虚霊不昧」ということこそ漱石漢詩の根本思想であった。[37]

と、この詩の境地を「漱石漢詩の根本思想」と解釈している。加藤氏が指摘した「宗教以前、即ち老荘や禅すらもそこから生れ又そこに消え

[35] 加藤二郎「草枕」（『漱石と漢詩―近代への視線―』2004.11.5 翰林書房）P.44
[36] 明治二十二年五月に、正岡子規の『七草集』のお返しという感じで漱石が作った『七草集』評の後に付け加えた九首の其七である。（『漱石全集　第18巻』P.115.116）
[37] 佐古純一郎「漱石の漢詩文」（『講座夏目漱石　第二巻』1982.2.25 有斐閣）P.308

て行く」というほど、「春興」及び「春日静坐」が老荘や禅を越えたかどうかは未だ検討する余地があるかもしれないが、少なくとも「洗尽塵懐忘我物」も「春興」の「逍遥随物化」も即ち、我も他者もなく、勿論物の分別もなく、ただ自然の中に我がすべて溶け込んでしまっているという境地は、画工、勿論漱石自身も一緒に求めていた内面の極地だといえるのであろう。完全に同レベルのものだとは言い切れないかもしれないが、こうした「物化」や「忘我」は、『草枕』というテクストの中では、画工の所謂「非人情」、那美の言葉では「世の中は気の持ち様一つでどうでもなります」、または大徹住職の偈語になると「竹影払階塵不動」などの形でそれぞれ具現されているのが明らかであろう。

よって、陶淵明の「桃花源」の境地は心がその俗世界と切り離すという前提の下で成立できるものであるが、一方、画工と漱石の「桃源郷」は俗世界と切り離すより、全面的に受け入れる姿勢を構えるのが前提で、あらゆるものに融合するのである。言い換えれば、前者が消極的で、後者がより積極的な態度をとっていると看做してよかろう。

（四）結び

『草枕』をどう読むべきかと考える際、画工の旅の本質は何だったのかという問題が真っ先に問われる。これについて、佐藤勝氏は次のような観点を示している。

> こうして「旅」は、二十世紀的現実を相手どつてする作者による意識（認識）の「旅」であり、またおそらくは二十世紀における芸術成立の試みとしての「旅」であつた。それは決して二十世紀を解脱して超俗の境に遊ぶ「旅」ではなかつたのである。[38]

[38] 佐藤勝「「草枕」論」（『漱石作品論集成　第二巻』編者片岡豊　小森陽一・桜楓社・1990.12.1・P.195）（初出--「「草枕」論」（『国語と国文学』第 49

「二十世紀を解脱して超俗の境に遊ぶ「旅」ではなかつた」と、氏ははっきりと、仙郷談や南画などのような説を否定するとともに、画工の「住み安」い居場所を求めようとする夢は必ず幻滅すると厳しく指摘している。一方、これとは全く反対の論点を主張する研究者もいる。渡辺昇一氏である。

> 『草枕』の中には熊本時代に作った漢詩がちりばめられている。そして『草枕』全体を通じて漱石が表現したことは、この漢詩の与えてくれる南画的な世界であったのだ。[39]

『草枕』に織り込まれた二首(前に論じた「春興」と「春日静坐」との二首)の漢詩に焦点を合わせた論説である。前述した通りに、『草枕』における旅は、確かに画工が世俗の煩わしさから遁れようとする主旨で出発した旅であり、その地理的環境も『桃花源記』の世界を彷彿させるような春麗らかな世界である。が、一旦旅先である那古井に足を入れると、現実の厳しい世界がどこまでも主人公にくっ付いてくることを見落としてはいけない。

『草枕』に織り込まれている二首の漢詩で詠われている境地は、渡辺昇一氏が指摘した「南画的な世界」として看做せないこともない[40]。が、漢詩を読み上げた後の画工の反応を無視してはいけない。「春日静坐」全篇に漂っている、俗世界から離れきった長閑な、所謂南画っぽい（淵明タイプでいえば「桃花源」と称してもいい）ムードを画工も我々読者も満喫できる。しかし、この詩が出来上がった直後、「もう一返最初から読み直して見ると、一寸面白く読まれるが、どうも、自分が今しがた入つた神境を写したものとすると、索然として物足りない。」[41]（六章）と、「物足りない」気持を画工が吐いている。「会得一日静。正知百年忙」とあるように、こうした「神境」は所詮一時的なものであり、そう長くは続かないことを誰よりも画工がよく知っている筈である。こうした世の中でどう対応すれば楽に

巻・東京大学国語国文学会・1972.4)

[39] 渡辺昇一『漱石と漢詩』1974.5.10 栄潮社出版株式会社 P.39

[40] 現に『草枕』の第一章で、画工が「余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である」と、理想的な詩の性質について触れた際にも「塵界を離れた」という表現を語っている。(『漱石全集　第３巻)P.9

[41] 『漱石全集　第３巻』P. 80

生きて行けるのか、というストラテジーが後から作った漢詩(漢詩集には「春興」と題されている)に織り込まれている。「逍遥随物化　悠然対芬菲」という姿勢を構えなければならないと、画工が気付いたのであろう。今度は、「あゝ出来た、出来た。是で出来た。寐ながら木瓜を観て、世の中を忘れて居る感じがよく出た。」[42]（十二章）と「神境」(画工タイプの「桃源郷」)を得た喜びを画工がここで漸く味わえたのである。単に俗世界から逃れるのではなく、逃れ切れない世俗に「物化」という態度で接する方法をここで確認できたからこそ、画工は心の底から「世の中を忘れて居る感じ」を味わえたのである。

故に、「春興」と題した漢詩で詠われている最高の境地も、画工の旅も決して単純な南画の世界、仙郷談レベルの旅として看做してはいけない。又、淵明の『桃花源記』[43]と同じ、まんざらの虚構のものとも言い切れない。

とはいえ、明治三十九年七月二十五日つまり、『草枕』執筆の前日に浜武元次に送った書簡の最後に漱石が「「無人島の天子とならば涼しかろ」是は発句なり」[44]と付け加えている。『草枕』の画工の旅に出る心境と重なっている。「無人島」とはつまり、誰もいない、人気のない、静かな所を指しているのは言うまでもなかろう。しかも「天子」という言葉から、気持が天子のようで、誰にも憚ることなく、我のままでいられる、自由自在な心境でいられる境地を漱石が憧憬していたことが想像できる。面白いことに、画工が詠った二首の漢詩「春日静坐」の「素琴横虚堂」「独坐無隻語」も「春興」の「孤愁高雲際　大空断鴻帰」も「無人島云々」の俳句と共通しており、全くの一人の空間を与えられているという点である。隔離された空間、もっと正確に言えば、人との付き合いを遮断した境地をそこで画工

[42] 『漱石全集　第3巻』P. 152

[43] 沼口勝氏が、陶淵明の曾祖陶侃の出身―渓族(五渓蛮)―瑶族（武陵蛮または武陵人）という詩人の家系、先祖の出身との深いかかわりを探りながら、『桃花源記』はまんざらのフィクションでもなく、「仙郷談の枠組みに、作者の理想とする真実の生活のある社会（新たな仙郷）像を盛った作品と言えるかと思う。」と、その写実性を論じている。(沼口勝『桃花源記の謎を解く』2001.2.25日本放送出版協会）P.51

[44] 『漱石全集　第22巻』P.530

も漱石も享受しているのである。役場を離れても、百姓たちと一緒に農耕生活を楽しむ陶淵明とは、明らかに異なっている。とはいえ、両者とも隠遁者に憧れる所がありながら[45]、淵明の「結廬在人境」や、画工の世間逃れの旅先が逆に戦争の話や那美の「出返り」など世俗そのままの世界という設定などから、いずれも「出世間的」ではないと捉えられる。その世俗に向って、淵明は「心遠地自偏」で、「車馬喧」(煩わしい役人の来訪)を絶とうとして生きていた。一方、画工(漱石に置き換えられる)は「非人情」(那美の言葉では「世の中は気の持ち様一つでどうでもなります」、または大徹住職の偈語「竹影払階塵不動」)という姿勢で対応している。

その画工のいわゆる「非人情」の内質について、佐々木充氏は、「「非人情」――世捨て人＝文人の精神は、その地へ至るための必須の条件であった。」[46]と、捉えている。

文人の精神といっても、それぞれの時代によってその精神が異なるし、漱石の「非人情」は決して世を捨てるという消極的な姿勢とは看做せない。寧ろ真正面から受けながら、それに左右されず、心が動かないという積極性のある姿勢である。故に、それを、人間とのつながりを切断すると捉えた那美の言行が奇矯の連発で、画工が画きたくても、そうした状態の那美を中々画に止められない。「憐れ」、「非人情」が旅の本質と理解するなら、この「憐れ」が那美にとっては他者との紐帯の回復とも捉えられる。

加藤二郎氏は、「重要なのは漱石と淵明とのかかわりの本質とすべきものが如何なる所にあったのかであり、そしてそれが結果的に淵明の詩句の摂取という様ないわば派生的な産物を生み出して行ったということであろう。」[47]と述べている。これは漱石と淵明とのかか

[45] ちょっと早い時期だが、明治二十八年四月十六日付神田乃武宛の漱石の書簡に「教授後未だ一週間に過ぎず候へども地方の中学の有様抔は東京に在つて考ふる如き淡泊のものには無之小生如きハーミット的の人間は大に困却致す事も可有之と存候」と「ハーミット」(隠遁者)志向を示している一節がある。『漱石全集　第22巻』P.77

[46] 同注8

[47] 加藤二郎「漱石と陶淵明」(『日本文学研究資料新集　夏目漱石・作家とその

わりを論ずる際に、どういう態度で捉えるべきかを述べている言説である。「淵明の詩句の摂取」「派生的な産物を生み出して行った」という、氏の論点に従えば、漱石は淵明の詩から淵明式の隠遁者精神を「摂取」しながら、漱石式の「ハーミット」気質――世俗とのかかわりを真正面から取り組みながらそれに囚われない姿勢――を「再生」したと言えるだろう。

更に具体的にいえば、淵明の出世間的姿勢から、世に向き合いながら心が動かないという「非人情」の身構え--言わば在家修行--という「派生的な産物」に変身したのである。とはいえ、この類の境地は漱石の一生の課題である。他者との関わりが煩わしくなった際、漢詩の中によく出ている、「独坐無隻語」の姿勢を構え、他者との関わりを断ち切り、そうした漱石流の「桃源郷」--陶淵明の「桃花源」の世界ではなく、非日常的空間・時間のゾーン--を、たとえ暫しの間でも享受し、心身とも癒すのである。

参考文献

和田利男　1937.8.1『漱石漢詩研究』　人文書院

佐藤勝　1972.4「「草枕」論」(『国語と国文学』第 49 巻・東京大学国語国文学会)

渡辺昇一　1974.5.10『漱石と漢詩』　栄潮社出版株式会社

清水孝純　1974.3「「草枕」の問題――特に「ラオコーン」との関連において――」(「文学論輯」21 号・九州大学文学研究会)

上垣外憲一　1982.2.5「漱石の帰去来――朝日新聞入社をめぐって――」(『講座夏目漱石　第四巻』有斐閣　)

佐古純一郎　1982.2.25「漱石の漢詩文」(『講座夏目漱石　第二巻)』有斐閣　)

東郷克美　1982.2「「草枕」――水・眠り・死――」(『別冊国文学夏目漱石必携Ⅱ』14 号・学燈社)

時代』編者　石崎等　1988.11.有精堂）P.129

鄭　清茂　1982.10『中国文学在日本』純文学出版社
中村宏　1983.9.5『漱石漢詩の世界』第一書房
芳賀徹　1990.10『絵画の領分―近代比較文化史研究』朝日新聞社
荒正人　1984.6.20　『増補改定　漱石研究年表』集英社
大津知佐子　1988.3「――波動する刹那――『草枕』論――」(「成城国文学」第4号・成城国文学会)
加藤二郎　1988.11.「漱石と陶淵明」(『日本文学研究資料新集　夏目漱石・作家とその時代』編者石崎等　有精堂　)
小坂晋　1990.9「『草枕』の憐れ」(『国文学解釈と鑑賞』第55巻9号・至文堂)
前田愛　1990.12.1「世紀末と桃源郷　『草枕』をめぐって」(『漱石作品論集成　第二巻』編者片岡豊　小森陽一桜楓社)(初出--「理想」第622号・理想社1985.3)
佐々木充　1990.12.1「草枕」――根源の記憶の地への旅―(『漱石作品論集成　第二巻』編者片岡豊　小森陽一桜楓社)(初出--『夏目漱石』有精堂1982.2)
田部井文雄＆上田武　2001.1.30　『陶淵明集全釈』明治書院
沼口勝　2001.2.25『桃花源記の謎を解く』日本放送出版協会
加藤二郎　2004.11.5「草枕」(『漱石と漢詩―近代への視線―』翰林書房　)